

令和 3 年 6 月 29 日現在

機関番号：10104

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K01528

研究課題名(和文) 20世紀初頭ウィーンにおけるマッハ・コネクションの解明と分析

研究課題名(英文) Studies in Mach's connection in the early twenty century

研究代表者

江頭 進 (EGASHIRA, SUSUMU)

小樽商科大学・商学部・副学長

研究者番号：80292077

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、これまで経済学史の中では、レーニンのマッハ批判以外の文脈で紹介されることはなかったエルンスト・マッハを中心に、19世紀末から20世紀初頭のドイツ語圏での知的相関関係を整理することを目的としたものである。マッハの経験主義が、ウィーン学団の論理実証主義とポパーの反証主義を経てフリードマンの実証主義につながることは確認されたが、当初考えていたカール・ポランニーへの影響は限定的であり、当時流行していたマッハの方法に若き日のカール・ポランニーが一時的に関心を持ったという以上のものではないことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

19世紀末のウィーンで起こった論理実証主義は、科学哲学上の重大な変革であるが、経済学の中でどういう意味を持ったのかはこれまであまり考えられてこなかった。なぜなら、経済学は長らく「実験できない科学」であり、統計の応用による理論の検証にも問題が多かったからである。今回の研究では、論理実証主義の一段階前のマッハの経験主義に戻って、知的ネットワーク内での位置づけを考えることで、経済学者とのつながりを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to organize the intellectual correlations in the German-speaking world at the end of the 19th and beginning of the 20th century, focusing on Ernst Mach, who has never been introduced in the history of economics in any context other than Lenin's critique of Mach. Although it was confirmed that Mach's empiricism led to Friedman's positivism via the logical positivism of the Vienna School and Popper's antinomianism, the influence on Karl Polanyi was limited as initially thought, and it was not more than a temporary interest of the young Karl Polanyi in Mach's method, which was in vogue at the time. On the other hand, the influence on Karl Polanyi in the Vienna intellectual network was limited.

研究分野：経済思想史

キーワード：Ernst Mach Karl Polanyi Ludwig Mises Richard Mises Friedrich Hayek 論理実証主義 経験主義 世紀末ウィーン

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

これまで、オーストリア系の経済学は、これまではカール・メンガーに始まるオーストリア学派かノイマン-モルゲンシュテルンのゲーム理論、あるいはハイエクやシュンペーターといった個々の経済学者に焦点を当てる研究が中心であり、その哲学的背景はわずかに新カント派との関係が論じられるのみであった。しかし、個々の主体の関係性については一貫した視点が存在せず、漠然としたウィーン文化圏というくくりでのみ語られるに過ぎなかった。そのため、なぜオーストリアでは、イギリスともフランスともアメリカとも異なる経済学が発達したのかという点について明確に説明されることが無かった。

そのため、これまでの研究は、19世紀末から20世紀初頭のウィーンのエconomic史学者たちを、個別に扱うことに終始しており、その結果として、オーストリア学派は明証としては存在するが、実際どのような集まりであるのかということについての合意が存在しなかった。

2. 研究の目的

これまで行われたことがなかったエルンスト・マッハを起点にした経済学史・思想史研究を実施し、マッハを起点とオーストリア系知識人のネットワークが明確化する。これにより、英米系経済学あるいはフランス・イタリア系経済学との根本的な違いの理由が明らかになる。

3. 研究の方法

ハイエクとシュンペーターに関してはすでに関係する主要な図書館等での調査がほぼ終了しており、それを再読してこれまでの研究との対照を行った。ポランニー兄弟のうちカールにかんしてはコロラド大学の電子資料を中心とした調査を行った。今回新型コロナウイルス感染拡大の影響のため、シカゴ大学等への渡航調査ができなかった。今後の感染状況をみて、継続的に資料収集を行う予定である。

4. 研究成果

本研究は、これまで経済学史の中では、レーニンのマッハ批判以外の文脈で紹介されることはなかったエルンスト・マッハを中心にして、19世紀末から20世紀初頭のドイツ語圏での知的相関関係を整理することを目的としたものである。マッハの経験主義が、ウィーン学団の論理実証主義とポパーの反証主義を経てフリードマンの実証主義につながることは確認されたが、当初考えていたカール・ポランニーへの影響は限定的であり、当時流行していたマッハの方法に若き日のカール・ポランニーが一時的に関心を持ったという以上のものではないことが明らかになった。マッハの影響を想定したのは、彼の師であるピクレル・ジュラがマッハのハンガリーへの紹介者であったこと、カール・ポランニー自身が、情熱的とも言えるマッハの紹介文を公表していることがあったからである。しかし、彼の後年の研究の中で、マッハの名前が出てこないこともあり、また彼の経済人類学がフィールドワークに基づいたものであるとしても、それを即、マッハの経験主義と結びつけるのは困難である。

他方でウィーン知的ネットワーク中で、これまで唯一位置づけがはっきりしなかったルードヴィヒ・ミーゼスが、弟のリヒャルト・ミーゼスとの関係で相対化され、実証主義とは異なる独特の合理主義になった経路を明らかにした。経済学者としての系譜はこれまでも語られてきていたが、経験論から論理実証主義へと至るウィーン科学論の中で、ミーゼスの『ヒューマン・アクション』をどのように捉えるかが明確でなかったが、数学論理と実在の相対的位置を考えれば、ミーゼス理論の新たな解釈が可能である。

また、マッハの経験主義は、科学の基礎に感覚により把握可能な実体を置くという点で同時代のプラグマティズムとの類似性を持つ。この点は、カール・ポランニーが指摘したものであるが、しかし、明証性という観点からは意図するところが同じであっても、知識の社会的な役割という観点で考えれば、マッハの経験主義とプラグマティズムは大きく異なる。

これらの成果は2020年に開催された第40回方法論フォーラムで発表された。今後英文化されて、海外誌に投稿される予定である。

今回の研究の中で、もう一つの目標としていたマイケル・ポランニーの「暗黙的知識」とマッハの議論の分析が十分に進まなかった。これは、マッハの心理学研究に関する追加の資料調査ができなかったことが原因である。新型コロナウイルス感染が収束した場合には、追加の検討を行いたい。マイケル・ポランニーとの関係が明らかになれば、分権的な裏付けが可能なハイエクとマッハの関係との比較が可能となり、Mirowskyが1990年代の論考で指摘した後、誰も検視していなかった、マイケル・ポランニーとハイエクの知識論の相違が明らかになると考えられる。両者は、社会主義に対して知識論の観点から批判的という点で一致するが、専門家の持つ知識のあり方

においては、明確な違いがある。マイケル・ポランニーの研究者が少ないこと、彼の暗黙的知識に関する誤った理解が普及していることなどから、この相違は無視されてきたが、現代のようなビッグデータと AI が急速に社会の意思決定を行うツールとして普及していく中で両者の相違を考えることは重要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 江頭進
2. 発表標題 Tarca Re:boot
3. 学会等名 進化経済学会北海道部会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nakatsugawa, M. and S.Egashira
2. 発表標題 The Relationship Between the Policy of Education and Economic Thought: A case of JET Program in Japan
3. 学会等名 The annual conference of History of Economic Society, Royola University (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江頭進
2. 発表標題 現代における市場の自由と人権 フリードマンとハイエクはどう答えるか
3. 学会等名 第23回進化経済学会名古屋大会、名古屋工業大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江頭進
2. 発表標題 エルンスト・マッハと知識論の系譜
3. 学会等名 第40回方法論フォーラム
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 小樽商科大学地域経済研究部編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 183
3. 書名 北海道社会の課題とその解決	

1. 著者名 小樽市人口減少問題研究会編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 266
3. 書名 人口半減社会と戦う	

1. 著者名 待鳥聡史・宇野重規編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 188
3. 書名 社会のなかのコモンズ	

1. 著者名 Egashira, S., M. Taishido, D.W.Hands and U. Maki eds.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Springer Nature	5. 総ページ数 240
3. 書名 A Genealogy of Self-Interest in Economics,	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------